

# 惰性的素数における虚二次体の $p$ 進 $L$ 関数について

東京大学・数理科学研究科 山本 修司 (Shuji YAMAMOTO)  
 Graduate School of Mathematical Sciences,  
 the University of Tokyo

## 1 序

$K$  を類数 1 の虚二次体,  $E/K$  を  $K$  の整数環  $O_K$  による虚数乗法を持つ楕円曲線とする.  $E$  に伴う  $K$  の量指標を  $\psi = \psi_{E/K}$  とおく. また  $p$  は  $K/\mathbb{Q}$  において惰性的な素数とし,  $E$  は  $p$  において good reduction を持つと仮定する.

$0 \leq j < k$  なる整数  $k, j$  および  $K$  の有限指標  $\chi$  に対し, Hecke  $L$  関数  $L(\psi^{-k}\bar{\psi}^j \chi, s)$  の  $s=0$  における特殊値を  $p$  進的に補間する  $p$  進  $L$  関数を考える.  $p$  が  $K/\mathbb{Q}$  で分解する場合には,  $k, j$  を  $p$  進数として動かす, いわゆる 2 変数の  $p$  進  $L$  関数が構成されている ([1], Chap. II). 一方ここで扱う惰性的な  $p$  については, Schneider-Teitelbaum [4] により,  $j=0$  として  $k$  について  $p$  進補間する 1 変数の  $p$  進  $L$  関数が得られている. 筆者は修士論文 [6] において, 任意に固定された  $j \geq 0$  に対し,  $k$  についての  $p$  進補間を与える  $p$  進  $L$  関数を構成した. 本稿ではこの結果を紹介する.

埋め込み  $\bar{\mathbb{Q}} \hookrightarrow \mathbb{C}$ ,  $\bar{\mathbb{Q}} \hookrightarrow \mathbb{C}_p$  を固定する.

$\psi$  の導手を  $f = f_\psi$  とおき,  $f \mid N$ ,  $p \nmid N$  なる整数  $N \geq 4$  をとる.

$$L = K(E[N]), \quad K_n = K(E[p^n]), \quad L_n = LK_n = K(E[Np^n]) \quad (0 \leq n \leq \infty)$$

とおき, これらの  $K$  上の Galois 群をそれぞれ

$$\Delta = \text{Gal}(L/K), \quad \Gamma_n = \text{Gal}(K_n/K), \quad \mathcal{G}_n = \text{Gal}(L_n/K)$$

とおく.

$K$  の  $A_0$  型量指標  $\varepsilon$  に対し, その導手  $f_\varepsilon$  が  $Np^\infty$  を割り切るとき,  $\varepsilon$  は連続準同型  $\varepsilon: \mathcal{G}_\infty \rightarrow \mathbb{C}_p^\times$  に拡張される. また特に  $\psi$  は  $\psi: \Gamma_\infty \xrightarrow{\sim} O_{K_p}^\times$  なる同型を導く (ここで  $O_{K_p}$  は  $K$  の  $p$  進完備化  $K_p$  の整数環を表す). この同型により,  $\mathcal{G}_\infty \cong \Delta \times \Gamma_\infty$  に locally  $K_p$ -analytic structure を定める.

**定理 1.1** ([6], Theorem 1.1.1)

$(6Np, a) = 1$ ,  $\psi(a) = a \in \mathbb{Z}$  なるイデアル  $a \subset O_K$  をとる. このとき各整数  $j \geq 0$  に対して,  $\mathcal{G}_\infty$  上の locally  $K_p$ -analytic distribution  $\tilde{\mu}_a^j$ , および  $(\Omega_p, \Omega_\infty) \in \mathbb{C}_p^\times \times \mathbb{C}^\times$  が存在して, 以下を満たす:

任意の整数  $k > j$ , および  $f_\varepsilon \mid Np^\infty$  なる  $(k, -j)$  型の量指標  $\varepsilon$  に対し,

$$\begin{aligned} \Omega_p^{k-j} \int_{G_\infty} \varepsilon \cdot (\psi^{-1}\bar{\psi})^j d\tilde{\mu}_a^j &= (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left( \frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \Omega_\infty^{-k-j} \\ &\times G(\varepsilon) \left( 1 - \frac{\varepsilon(p)}{p^2} \right) (N(\mathfrak{a}) - \varepsilon(\mathfrak{a})) L(\varepsilon^{-1}, 0) \end{aligned}$$

が成り立つ.

ここで,  $d_K$  は  $K$  の判別式,  $N = N_{K/\mathbb{Q}}$  は絶対ノルムを表す. また  $G(\varepsilon) \in \mathbb{C}$  は  $\varepsilon$  の有限部分  $\varepsilon\psi^{-k}\bar{\psi}^j$  に対して定まる数 (ある種の Gauss 和) である.

なお上の等式において, 本来左辺は  $\mathbb{C}_p$ , 右辺は  $\mathbb{C}$  の元であり, 定理の主張はこれらが共に  $\overline{\mathbb{Q}}$  に属するという事を含んでいる.

distribution  $\tilde{\mu}_a^j$  の構成には, Schneider-Teitelbaum [4] による  $p$  進 Fourier 変換の理論を用いる. これにより, 問題は  $E$  の形式群  $\hat{E}$  上で特殊値  $L(\varepsilon^{-1}, 0)$  の「母関数」を構成することに帰着される. そこでまず第2節において, このような  $p$  進補間と Fourier 変換の関係について, Riemann  $\zeta$  関数の場合を例として説明する. 次に第3節で  $\hat{E}$  上の Fourier 変換論, 第4, 5節で母関数の構成について述べる.

## 2 $p$ 進 $\zeta$ 関数と Fourier 変換

本節では Riemann  $\zeta$  関数  $\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} n^{-s}$  の特殊値  $\zeta(-k)$  ( $k = 0, 1, \dots$ ) の  $p$  進補間と, 形式乗法群  $\hat{G}_m$  上の Fourier 変換との関係を説明する.

まず, これらの特殊値の母関数を与える次の命題に注意する.

**命題 2.1**  $p$  で割れない整数  $a$  に対して

$$F_a(x) = \frac{x}{1-x} - \frac{ax^a}{1-x^a}$$

とおくと, 整数  $k \geq 0$  に対して

$$\left( x \frac{d}{dx} \right)^k F_a(1) = (1 - a^{k+1}) \zeta(-k)$$

が成り立つ.

これにより,  $\zeta(-k)$  を  $p$  進補間するためには,  $s \in \mathbb{Z}_p$  に対して, 乗法群上の不変微分  $x \frac{d}{dx}$  を「 $s$  回行う」ことにしかるべき意味を与えればよい. そのために用いられるのが乗法群上の Fourier 変換である.

$\widehat{G}_m = \text{Spf}(\mathbb{Z}_p[[x-1]])$  を  $\mathbb{Z}_p$  上の形式乗法群とする. このとき同型

$$\begin{aligned} \mathbb{Z}_p &\xrightarrow{\cong} \text{Hom}(\widehat{G}_m, \widehat{G}_m) \\ t &\longmapsto (x \mapsto x^t) \end{aligned}$$

が成り立つ.

$\mathbb{Q}_p$  の有限次拡大の整数環  $O$  に対し,  $\mathbb{Z}_p$  上の  $O$ -valued measure のなす空間を  $M(\mathbb{Z}_p, O)$  で表す.  $\mu \in M(\mathbb{Z}_p, O)$  に対し, その Fourier 変換<sup>1</sup>  $F_\mu(x) \in O[[x-1]]$  を

$$F_\mu(x) := \int_{\mathbb{Z}_p} x^t d\mu(t) = \sum_{n=0}^{\infty} \left( \int_{\mathbb{Z}_p} \binom{t}{n} d\mu(t) \right) (x-1)^n$$

で定める.

**定理 2.2** (1) Fourier 変換

$$\begin{aligned} M(\mathbb{Z}_p, O) &\longrightarrow O[[x-1]] \\ \mu &\longmapsto F_\mu(x) \end{aligned}$$

は  $O$  代数の同型である.

(2)  $\mu \in M(\mathbb{Z}_p, O)$  に対し,

$$\left(x \frac{d}{dx}\right)^k F_\mu(x) = \int_{\mathbb{Z}_p} t^k x^t d\mu(t)$$

が成り立つ.

(3)  $\text{supp}(\mu) \subset \mathbb{Z}_p^\times$  となるための必要十分条件は,  $\sum_{\zeta^p=1} F_\mu(\zeta x) = 0$  が成り立つことである.

命題 2.1, 定理 2.2 を用いると,  $\zeta(-k)$  の  $p$  進補間は容易に実現できる. 実際命題 2.1 の有理関数  $F_a(x)$  を  $\mathbb{Z}_p[[x-1]]$  の元とみなし,  $F_a = F_{\mu_a}$  なる  $\mu_a \in M(\mathbb{Z}_p, \mathbb{Z}_p)$  をとる. すると

$$\int_{\mathbb{Z}_p} t^k d\mu_a(t) = (1 - a^{k+1})\zeta(-k) \quad (k \in \mathbb{Z}, k \geq 0)$$

が成り立つ.

さらに Galois 群上の測度を得るには次のようにする. まず

$$\tilde{F}_a(x) = F_a(x) - \frac{1}{p} \sum_{\zeta^p=1} F_a(\zeta x) = F_a(x) - F_a(x^p)$$

とおき, これに対応する測度を  $\tilde{\mu}_a$  とおくと,  $\text{supp}(\tilde{\mu}_a) \subset \mathbb{Z}_p^\times$  であり,

$$\int_{\mathbb{Z}_p^\times} t^k d\tilde{\mu}_a(t) = (1 - p^k)(1 - a^{k+1})\zeta(-k)$$

<sup>1</sup>  $\widehat{G}_m$  上の」という場合, むしろ逆 Fourier 変換というべきかも知れない.

が成り立つ。そこで円分指標  $\varphi: \Gamma := \text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_{p^\infty})/\mathbb{Q}) \xrightarrow{\sim} \mathbb{Z}_p^\times$  によって  $\tilde{\mu}_a$  を  $\Gamma$  上に移し、これを再び  $\tilde{\mu}_a$  と書けば、

$$\int_{\Gamma} \varphi^k d\tilde{\mu}_a = (1-p^k)(1-a^{k+1})\zeta(-k)$$

となる。

### 3 $\hat{E}$ 上の Fourier 変換

記号は第1節の通りとする。楕円曲線  $E$  に伴う形式群を  $\hat{E}$  とおき、 $T^* = \text{Hom}(\hat{E}, \hat{\mathbb{G}}_m)$  とおく (この  $\text{Hom}$  は  $O_{\mathbb{C}_p}$  上の形式群としての準同型全体を表す)。  $T^*$  は  $O_{K_p}$  上階数1の自由加群となる。また、 $x \in \hat{E}(O_{\mathbb{C}_p})$  に対して

$$\begin{aligned} f_x: T^* &\longrightarrow \mathbb{C}_p^\times \\ t &\longmapsto t(x) \end{aligned}$$

とおくと、 $x \mapsto f_x$  は同型  $\hat{E}(O_{\mathbb{C}_p}) \cong \text{Hom}(T^*, \mathbb{C}_p^\times)$  を与える (この  $\text{Hom}$  は locally  $K_p$ -analytic な群準同型全体を表す)。

$\hat{E}$  が定める  $\mathbb{C}_p$  上の rigid analytic group を再び  $\hat{E}$  で表し、その上の rigid analytic function のなす空間を  $\mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p)$  とおく。また  $T^*$  上の  $\mathbb{C}_p$ -valued locally  $K_p$ -analytic distribution のなす空間を  $D(T^*, \mathbb{C}_p)$  とおく。  $\mu \in D(T^*, \mathbb{C}_p)$  に対し、その Fourier 変換  $F_\mu \in \mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p)$  を

$$F_\mu(x) = \int_{T^*} f_x d\mu$$

で定める。

**定理 3.1** (Schneider-Teitelbaum [4])

(1) Fourier 変換

$$\begin{aligned} D(T^*, \mathbb{C}_p) &\longrightarrow \mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p) \\ \mu &\longmapsto F_\mu(x) \end{aligned}$$

は  $\mathbb{C}_p$  代数の同型である。

(2) 同型  $t: T^* \xrightarrow{\sim} O_{K_p}$ 、および  $E/K$  上の不変微分形式  $\omega \neq 0$  を固定し、 $\omega$  に対応する不変微分を  $\partial_\omega$  と書く。このとき定数  $\Omega_p \in \mathbb{C}_p^\times$  が存在して、

$$\partial_\omega^k F_\mu(x) = \Omega_p^k \int_{T^*} t^k f_x d\mu$$

が成り立つ。

(3)  $\text{supp}(\mu) \subset T^* \setminus pT^*$  となるための必要十分条件は、 $\sum_{[p](z)=0} F_\mu(x +_{\hat{E}} z) = 0$  が成り立つことである。

この定理を用いて定理 1.1 における distribution  $\tilde{\mu}_a^j$  を構成するには、命題 2.1 の  $F_a$  のような母関数を構成する必要がある。以下の2節ではこの構成について述べる。

## 4 関数 $\theta_{E,a}$ と $L$ 関数の特殊値

本節では、 $L$  関数の特殊値がモジュラー曲線上の普遍的楕円曲線  $\mathbb{E}/Y_1(Np^n)$  の上の有理関数  $\theta_{E,a}$  の対数微分の値として現れることを説明する。

### 4.1 関数 $\theta_{E,a}$

**命題 4.1** ([5], Chap. II, Proposition 1.1)

$E/S$  をスキーム  $S$  上の楕円曲線とし、 $a$  を 6 と互いに素な整数とする。また  $6a$  が  $S$  上可逆であると仮定する。このとき以下を満たす  $E$  上の有理関数  $\theta_{E,a}$  が一意的に存在する：

(1)  $a$  と互いに素で  $S$  上可逆な任意の整数  $b \neq 0$  に対し、 $E$  上の  $b$  倍写像のノルムを  $N_b$  と書くと、 $N_b(\theta_{E,a}) = \theta_{E,a}$  が成り立つ。

(2)  $\text{Div}(\theta_{E,a}) = a^2 \cdot [0] - \sum_{P \in E[a]} [P]$ .

### 4.2 微分作用素 $\partial, \mathbb{D}$

任意の楕円曲線  $E/S$  に対し、 $\omega_{E/S} = \text{coLie}(E/S)$ ,  $\omega_{E/S}^\vee = \text{Lie}(E/S)$  とおき、合成

$$\partial: \mathcal{O}_E \xrightarrow{d} \mathcal{O}_E \otimes_{\mathcal{O}_E} \Omega_{E/S} \cong \mathcal{O}_E \otimes_{\mathcal{O}_S} \omega_{E/S}$$

によって微分作用素  $\partial$  を定める。これに  $\omega_{E/S}^{\otimes r}$  をテンソルして得られる写像  $\mathcal{O}_E \otimes \omega_{E/S}^{\otimes r} \rightarrow \mathcal{O}_E \otimes \omega_{E/S}^{\otimes r+1}$  もやはり  $\partial$  で表す。

またモジュラー曲線  $Y_1(Np^n)/\mathbb{Q}$  上の普遍的楕円曲線および原始  $Np^n$  等分点をそれぞれ  $\mathbb{E}$ ,  $\alpha_n^\vee$  で表し、作用素  $\mathbb{D}$  を

$$\begin{aligned} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \xrightarrow{\nabla} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \Omega_{Y_1(Np^n)}^1 &\xleftarrow{\sim} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \omega_{\mathbb{E}/Y_1(Np^n)}^{\otimes 2} \\ &\rightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \text{Symm}^2(H_{\text{dR}}^1) \rightarrow \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1) \end{aligned} \quad (4.2)$$

なる合成によって定める。ここで  $H_{\text{dR}}^1 = H_{\text{dR}}^1(\mathbb{E}/Y_1(Np^n))$  であり、 $\nabla$  は Gauss-Manin 接続、その右の同型は小平-Spencer 同型である。

### 4.3 CM 点における値

記号は第 1 節の通りとする。 $H_1(E(\mathbb{C}), \mathbb{Z})$  の  $\mathcal{O}_K$  上の基底  $\gamma$  を固定し、

$$\alpha_n = \exp\left(\frac{1}{N\psi(p)^n} \gamma\right) \in E[Np^n] \quad (n \geq 0)$$

とおく。また  $\text{End}(E) \cong \mathcal{O}_K$  の作用から得られる直和分解

$$H_{\text{dR}}^1(E/K) = \omega_{E/K} \oplus \omega_{E/K}^\vee$$

における第1成分への射影を  $\text{pr}$  と書くことにする.

このとき,  $k > j \geq 0$  および  $\sigma \in \mathcal{G}_n = \text{Gal}(L_n/K)$  に対して,

$$L(k, j, \sigma) = \text{pr} \circ (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \mathbb{D}^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a}) \in \underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K L_n$$

とおく. ただし  $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_n) \rightarrow Y_1(Np^n)$  は組  $(E, \sigma(\alpha_n))$  によって定まる  $Y_1(Np^n)$  の有理点を表す.

$L(k, j, \sigma)$  と, 我々の考える  $L$  関数の特殊値との関係は次の命題で与えられる.

**命題 4.3**  $\omega \neq 0$  を  $\underline{\omega}_{E/K}$  の基底とする. このとき  $\underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K \mathbb{C}$  における等式

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) = & (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left( \frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \left( \int_{\gamma} \omega \right)^{-k-j} N^{k-j} \psi^k \bar{\psi}^{-j}(p)^n \\ & \times \left\{ N(\mathfrak{a}) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma) - \psi^k \bar{\psi}^{-j}(\mathfrak{a}) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma \sigma_{\mathfrak{a}}) \right\} \cdot \omega^{\otimes k+j} \end{aligned}$$

が成り立つ.

命題 4.3 の証明の概略を述べる. まず実解析的微分作用素  $\vartheta(C^\infty)$  を

$$\vartheta(C^\infty): \underline{\omega}_{\mathbb{E}}^{\otimes r} \hookrightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \xrightarrow{\mathbb{D}} \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1) \xrightarrow{\text{pr}} \underline{\omega}_{\mathbb{E}}^{\otimes r+2}$$

によって定義する. ここで, 最後の  $\text{pr}$  は Hodge 分解  $H_{\text{dR}}^1 = \underline{\omega}_{\mathbb{E}} \oplus \overline{\omega}_{\mathbb{E}}$  から定まる射影である. このとき

$$L(k, j, \sigma) = (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(C^\infty)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a})$$

が成り立つ. また  $\vartheta(C^\infty)$  が  $C^\infty$  モジュラー関数に作用する微分作用素

$$\frac{-\pi}{\text{Im}(\bar{\omega}_1 \omega_2)} \left( \bar{\omega}_1 \frac{\partial}{\partial \omega_1} + \omega_2 \frac{\partial}{\partial \omega_2} \right)$$

と一致することから,  $\vartheta(C^\infty)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a})$  は実解析的 Eisenstein 級数によって表されることが分かる ([2], (2.3.38)). よって実解析的 Eisenstein 級数の CM 点における値と  $L$  関数の特殊値との関係 ([1], Chap. II, 3.5) から命題 4.3 が従う.

## 5 母関数の構成

$L_n$  の  $\mathbb{C}_p$  における閉包を  $L_{n,p}$  とおく. この節では,  $L(k, j, \sigma)$  を  $\underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K L_{n,p}$  の中で計算することによって, 母関数を構成する.

以下, 記号の簡略化のため  $O = O_{K_p}$  とおく.

$E/K$  の  $O$  上のモデル  $\mathcal{E}$  をとり,  $\mathcal{E} \bmod p$  の universal formal deformation を  $\mathcal{E}^u/R$  とおく. また  $n \geq 0$  に対して,  $\mathcal{E}^u/R$  上の ([3] の意味での) 原始  $Np^n$  等分点の相対モジュライ空間を

$$\text{Spec}(R_n) = [\Gamma_1(Np^n)]_{\mathcal{E}^u/R}$$

とおき, その普遍的原始  $Np^n$  等分点を再び  $\alpha_n^u$  で表す.

### 5.1 微分作用素 $\vartheta(p)$

(非標準的な) 同型  $R \cong O[[T]]$  をとり,

$$R^{\text{PD}} = \left\{ \sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{T^n}{n!} \mid a_n \in O \right\}$$

とおく. このとき, Gauss-Manin 接続に関して水平な同型

$$H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \cong H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}/O) \otimes_O R^{\text{PD}}$$

が存在する. これと  $O_K$  の作用による直和分解  $H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}/O) \cong \omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}$  より,

$$H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \cong \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes_O R^{\text{PD}} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee} \otimes_O R^{\text{PD}} \quad (5.1)$$

が得られる. この直和分解における第1射影をやはり  $\text{pr}$  で表すと, 合成

$$\phi: \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes_R R^{\text{PD}} \hookrightarrow H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \xrightarrow{\text{pr}} \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes_O R^{\text{PD}} \quad (5.2)$$

は ( $T=0$  で identity であることから) 同型となる. そこで作用素  $\vartheta(p)$  を

$$\begin{aligned} \vartheta(p): \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes r} \otimes_R R^{\text{PD}} &\hookrightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R)) \otimes_R R^{\text{PD}} \\ &\xrightarrow{\mathbb{D}} \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R)) \otimes_R R^{\text{PD}} \\ &\xrightarrow{\text{pr}} \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r+2} \otimes_O R^{\text{PD}} \xrightarrow{\phi^{-1}} \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes r+2} \otimes_R R^{\text{PD}} \end{aligned}$$

によって定義する. すると,  $\vartheta(C^\infty)$  の場合と同様に

$$L(k, j, \sigma) = (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(p)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

が成り立つ. ただしここでは  $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_{n,p}) \rightarrow \text{Spec}(R_n)$  である.

### 5.2 形式群上への lift

$\mathcal{E}^u$  の形式群を  $\widehat{\mathcal{E}}^u = \text{Spf}(A)$  とする. パラメータ  $X$  をとって  $A \cong R[[X]]$  とし,

$$A' = \left\{ \sum_{n=0}^{\infty} a_n X^n \mid a_n \in R^{\text{PD}}[[p^{-1}]], |a_n|_p p^{-n\epsilon} \rightarrow 0 \ (\forall \epsilon > 0) \right\}$$

とおく. また  $\alpha_n^u$  を

$$\alpha_n^u = \alpha_n'^u + \alpha_n''^u, \quad \alpha_n'^u \in \mathcal{E}^u[[p^n]], \alpha_n''^u \in \mathcal{E}^u[[N]]$$

と分解する.

このとき, 次の命題を満たす作用素

$$\partial_i: A' \longrightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes i} \otimes_O A' \quad (i = 1, 2)$$

を構成することができる.

命題 5.3 ([6], Lemma 4.4.4, 4.4.5, 4.5.4)

$r \geq 0$  に対して,  $\partial_i$  に  $\omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r}$  をテンソルした写像  $\omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r} \otimes A' \rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r+i} \otimes A'$  も同じ記号  $\partial_i$  で表す. このとき  $\partial_1 \circ \partial_2 = \partial_2 \circ \partial_1$  が成り立つ. また次の図式はそれぞれ可換である. (ここで  $R_{n,Q}^{\text{PD}} = R_n \otimes_R R^{\text{PD}}[p^{-1}]$  とおいた.)

$$\begin{array}{ccc} A' & \xrightarrow{\partial_1} & \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes A' \\ & \searrow \partial & \downarrow \phi^{-1} \\ & & \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes A' \end{array} \quad \begin{array}{ccc} A' & \xrightarrow{\partial_2} & \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes 2} \otimes A' \\ (\alpha_n^u)^* \downarrow & & \downarrow \phi^{-1} \otimes (\alpha_n^u)^* \\ R_{n,Q}^{\text{PD}} & \xrightarrow{\vartheta(p)} & \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes 2} \otimes R_{n,Q}^{\text{PD}} \end{array}$$

$\partial_i$  の構成は次のように行う. まず

$$\phi: \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes R^{\text{PD}} \hookrightarrow (\omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}) \otimes R^{\text{PD}} \rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes R^{\text{PD}}$$

が同型であることから,

$$P: \text{Spec}(R^{\text{PD}}) \rightarrow \mathbb{V}_O(\text{Hom}(\omega_{\mathcal{E}/O}, \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee})) = \mathbb{V}_O((\omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee})^{\otimes 2}) =: \mathbb{V}_2$$

なる射 ( $p$  進周期写像) が誘導される (ただし  $\mathbb{V}_B(M)$  は環  $B$  上の有限生成自由加群  $M$  に伴うアフィン空間を表す). さらに

$$\mathbb{V}_1 := \mathbb{V}_O(\omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}), \quad \mathbb{V}_R := \mathbb{V}_R(\omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\vee})$$

とおくと,  $P$  の定義から

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{V}_R \otimes_R R^{\text{PD}} & \xrightarrow{\tilde{P}} & \mathbb{V}_1 \times_O \mathbb{V}_2 \\ \downarrow & & \downarrow \\ \text{Spec}(R^{\text{PD}}) & \xrightarrow{P} & \mathbb{V}_2 \end{array}$$

なる cartesian diagram を得る.

命題 5.4 ([6], Proposition 4.4.1)

合成写像

$$\text{Spec}(A') \xrightarrow{\log} \mathbb{V}_R \otimes R^{\text{PD}} \xrightarrow{\tilde{P}} \mathbb{V}_1 \otimes_O \mathbb{V}_2$$

は, 微分加群の同型

$$(\text{coLie}(\mathcal{E}) \oplus \text{coLie}(\mathcal{E})^{\otimes 2}) \otimes_O A' \xrightarrow{\sim} \widehat{\Omega}_{A/O} \otimes_A A'$$

を導く. ここで  $\widehat{\Omega}_{A/O}$  は  $(T, X)$  進完備化された微分加群を表す.

この命題を用いて,

$$\begin{aligned} \partial_i: A' &\xrightarrow{d} \widehat{\Omega}_{A/O} \otimes_A A' \cong (\omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes 2}) \otimes_O A' \\ &\rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes i} \otimes_O A' \quad (i = 1, 2) \end{aligned}$$

と定める. これらが命題 5.3 を満たすことは比較的容易に確かめられる.



### 5.3 $L(k, j, \sigma)$ の書き換え

作用素  $\partial_1, \partial_2$  を用いて,  $L(k, j, \sigma)$  を次のように書き直すことができる.  
 まず  $\alpha \in \mathcal{E}^u$  による translation  $\beta \mapsto \alpha + \beta$  を  $\tau_\alpha$  で表すと,

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(p)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\tau_{\alpha_n^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial_2^j \circ \partial_1^{k-j} \log(\tau_{\alpha_n^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial_1^{k-j} \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \end{aligned}$$

となる. また  $\alpha_n$  を

$$\alpha_n = \alpha_n' + \alpha_n'', \quad \alpha_n' \in E[p^n], \alpha_n'' \in E[N]$$

と分解し,  $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_{n,p}) \rightarrow \text{Spec}(R_n)$  の上の楕円曲線の射  $E \rightarrow \mathcal{E}^u$  を  $\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)}$  と書くと,

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) &= \sigma(\alpha_n')^* \circ (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \partial_1^{k-j} \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= \sigma(\alpha_n')^* \circ \partial^{k-j} \circ (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \end{aligned}$$

と書ける. さらに, 可換図式

$$\begin{array}{ccc} \text{Spec}(L_{n,p}) & \xrightarrow{x_{E, \sigma(\alpha_n)}} & \text{Spec}(R_n) \\ & \searrow x_{E, \sigma(\alpha_n'')} & \downarrow x_{\mathcal{E}^u, \alpha_n^u} \\ & & \text{Spec}(R_0) \end{array}$$

と,  $\sigma_p := ((p), L/K) \in \Delta$  に対して  $\alpha_0 = [\psi(p)^n](\alpha_n'') = \sigma_p^n(\alpha_n'')$  であることから,

$$L(k, j, \sigma) = \sigma(\alpha_n')^* \circ \partial^{k-j} \circ (\tilde{x}_{E, \sigma_p^{-n}(\alpha_0)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_0^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

が成り立つことが分かる.

以上をまとめて, 次の命題を得る:

**命題 5.5**  $\omega_{E/K}$  の基底  $\omega$  を固定する.  $j \geq 0$ ,  $\sigma \in \mathcal{G}_n$  に対して

$$F_{\sigma, a}^j \cdot \omega^{\otimes 2j} = (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_0)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_0^u}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

によって  $F_{\sigma, a}^j$  ( $\in \mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p)$ ) を定めると,

$$\begin{aligned} \partial_\omega^{k-j} F_{\sigma_p^{-n}, a}^j(\sigma(\alpha_n')) &= (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left( \frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \left( \int_\gamma \omega \right)^{-k-j} N^{k-j} \psi^k \bar{\psi}^{-j}(p)^n \\ &\quad \times \left\{ \mathbf{N}(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma) - \psi^k \bar{\psi}^{-j}(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma \sigma_a) \right\} \end{aligned}$$

が成り立つ. ( $F_{\sigma, a}^j$  は  $\sigma|_L \in \Delta$  にしかよらないので,  $F_{\sigma_p^{-n}, a}^j$  は well-defined である.)

これが求める母関数である. ここから実際に  $\mathcal{G}_\infty$  上の distribution を作る議論はここでは省略する.

## 参考文献

- [1] E. de Shalit. *Iwasawa Theory of Elliptic Curves with Complex Multiplication*. Perspectives in Mathematics, Vol. 3. Academic Press, 1987.
- [2] N. Katz.  $p$ -adic  $L$ -functions for CM fields. *Invent. Math.*, Vol. 49, pp. 199–297, 1978.
- [3] N. Katz and B. Mazur. *Arithmetic Moduli of Elliptic Curves*. Annals of Mathematics Studies, 108. Princeton University Press, 1985.
- [4] P. Schneider and J. Teitelbaum.  $p$ -adic Fourier theory. *Documenta Math.*, Vol. 6, pp. 447–481, 2001.
- [5] T. Tsuji. Explicit reciprocity law and formal moduli for Lubin-Tate formal groups. Preprint.
- [6] S. Yamamoto. On  $p$ -adic  $L$ -functions for CM elliptic curves at supersingular primes. Master's thesis, the University of Tokyo, 2003.